思い出のカルパッチョ

やまさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い出のカルパッチョ

【Ｎコード】
Ｎ３５２２Ｍ

【作者名】
やまさん

【あらすじ】
カルパッチョを知らないだって！？
そんな馬鹿な！？
でも……カルパッチョってどんなのだったっけ？
あぁ、わかんねぇ。
でも、今は暇を持て余している時期だ。
いっちょ思い出探しといきますか！！

序章〜セカンドコンタクト〜

「なぁ、カルパッチョ作ってくれよ」
と僕は目の前に座っている自分の嫁に頼んでみた。
「え？カルパッチョ？」
いきなりのことにそうとう戸惑っているようだった。
「そう、カルパッチョ。知ってるだろ？」
「え？何言ってるのあなた。私そんなの聞いたことないわよ」
「……え？なっ、なんだってぇ〜！？」
僕は驚いた。この世にカルパッチョを知らない人がいたなんて。
「ほっ、ほんとに知らないのか？」
「えぇ、知らないわよ」
僕の今までの常識が覆された気分だった。まさかあの魅惑の味を知らないなんて……。人生の半分は損しているようなもんだ、と僕は大声で心の中で叫んだ。
「ねぇ、あなた。カルパッチョってどういう料理なの？教えてくれれば頑張って作ってみるから」
「そうか。わかった。カルパッチョっていうのはな……」
このあとにカルパッチョについての説明が来るはずなのだが、僕の口から次の言葉は出てこない。
「（あれ？）」
心の中に？がいくつも浮かんでくる。僕は全精力を脳につぎ込んだ。きっと今僕の脳は今までの数倍の速さで動いているだろう。そう感じてはいるのだがいっこうにカルパッチョの記憶が浮かんでこない。
「え〜っと……」
提案した以上僕は引き下がることを許されない。今ここで引き下がってしまったら即天罰をくらって打ち首獄門とも言えるような惨劇を身に宿すことになるだろう。それだけは絶対に避けなければならない。

「そう、思い出した。パスタだ。うん、パスタだったきっと。いや……うん、絶対。そうパスタだったんだ。あ～っはっはっは～」
今僕の姿を見ている人がいるとしたら僕はとんでもなく阿呆で馬鹿でどうしようもない野郎であろう。だがそんな僕を見ても
「あなた。そのカルパッチョってどんなパスタなの？」
などと言ってくれるのは彼女の優しさだろうか。いや違う。彼女はきっと僕が覚えていないのを察しているんだ。
「たっ確か、やっ野菜が入ってた」
「ふ～ん。どんな風に入ってたの？どんな野菜が入ってるの？」
彼女の質問は単純明快。理にかなったしっかりとした質問だった。それがゆえに僕の心に深く突き刺さってゆく。
「えっと……」
ついに僕もネタが切れた。ここは潔く白状した方がいい。そう理性が言ってくれているのだが僕の感情はあくまで『馬鹿』であった。
「きょっ今日はやっぱりカルパッチョはいいや。いつも通りの食事を頼む」
「あら、どうしたの急に」
「いいと言ったらいいのだ」
なんとかまくしたててごまかした。いや、やはり彼女は僕のウソに気付いているに違いない。でも僕の言葉をそれ以上深く追求しようとしないところがいつもらしくなかった。だがその違和感はけっして嫌なものではなかった。なぜなら台所に向かう彼女の後姿を見たとき彼女が楽しそうに見えたからだ。
「（どうしてだろうか？）」
そんなことを考えても何も思い浮かばなかった。だが一つ、彼女の後姿を見て思い出したことがあった。それは小学五年生のとき、僕の初恋の人が調理実習で作ったカルパッチョを僕にこっそりくれ、それを食べたときの記憶であった。その味が無類の味であったと僕の記憶は告げている。
「（そうか。僕はきっとそのときのカルパッチョをもう一度味わい

たいと思ったのだろうな）」
一人静かに僕は納得する。だが、ここまでわかってしまった以上、もう一度それを食べずにはいられなかった。
ときは夏。仕事も休暇に入りオフシーズンともいえる日々。そんな暇を持て余している僕の『カルパッチョ探しの旅』は今幕を開けたのであった。

第一章～帰省？～

「朝よ。早く起きて」
「待ってくれ。あと1時間だけ」
「……はぁ？くだらないこと言ってないで早く起きて」
「だから待ってくれって、あと1時間だけ」
「……はぁ。あなたってホント馬鹿ね。今何時だかわかる？」
「もちろんだとも。お前が起こしてくれるのはいつも7時だからな。今は7時だ！」
「残念でした～。今の時刻はもう10時よ。こんな時間まで布団にこもっていて暑くないの？」
「……」
思考を中断し僕は自分の体および周辺の温度を体内温度計で測ってみた。……っ暑い！
「あちぃ～」
『ガバッ』という効果音が付いてきそうなくらいの勢いで僕は自分の体から掛け布団を引っぺがした。そして、たいして眠くもない目をこすり視界をクリアにした。
「おはよう」
「やっと起きたわね。おはよう」
眩しいぐらいの笑顔を僕に向けて嫁は挨拶を返してくれた。こうして僕の一日は始まる。

「ねぇ、あなた。何時頃出発するの？」
「え？どこか行くのか？」
「いや、私が聞いてるんだから出発するのはあなたでしょ……」
「あぁ、そうか。悪い悪い。そんで僕はどこに出かけなきゃならんのだ？」
「ねぇ、あなた。もしかして私をからかってるの？馬鹿にしてるの

？」
「へ？いやいや、そんなことはめっそうもございませんよ、ええ。あっ、確かに朝はからかったけど、今は違うんだ」
「へぇ～」
「なんだその目は。信じてないって言うのか？冗談じゃない。僕の目をしっかりと見てみろ」
僕はそう言って顔をぐいっと突き出した。
「冗談よ、冗談。それでホントに忘れちゃったの？」
「あぁ。忘れた」
「はぁ、あなたの記憶能力って小学生並みね。昨日の夜にあなたが言ったこと覚えてる？」
「ええっと……寝る前に愛してるって」
「それじゃなぁ～い！っていうか急にそんなこと言わないでよね。恥ずかしいじゃない」
「ははは。からかいがいがあって面白いなぁ」
「そんなこと言ってたら答え教えないわよ」
「すいません。教えてください」
「あなた昨日の夜に急にカルパッチョが食べたいって言ったのは覚えているわよね？」
「あぁ、それなら覚えている」
「そう。そしてあなたはそのあと急に故郷に帰ろうと言ったのよ」
「え？」
故郷？なんでだろうか？僕は考えた。すると一つの記憶にぶち当たった。
「（あの味探しか）」
「思い出したようね」
「まあな。よし、そんじゃすぐにでも出かけるか」
「えぇ！？ちょっと待ってよ。急すぎるわよ」
「じゃあ訂正しよう。準備が整い次第出発だ」
ここからが本当の『カルパッチョ探しの旅』の始まりのように感じ

つつ、僕は自らの準備を始めるのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3522m/

思い出のカルパッチョ

2010年10月10日05時31分発行